六番めの善鬼

森野青果

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
六番めの善鬼

【Ｎコード】
Ｎ１４６４Ｚ

【作者名】
森野青果

【あらすじ】
見た目は美少年だが、三百年ほど生きた老魔法使いのぼく。全盛期には王国を滅ぼしかけたけれど、さすがに最近は魔力の衰えを感じ始めている。長年連れ添った五匹の使鬼たち（見た目は美女・美少女揃い）も反抗的になってくる。そんなある日、使鬼たちを解き放たなければ、いよいよ命が危ないと告げられる。しかも彼女らは契約を解除されたとたん、長年こき使われた恨みを晴らすため、ぼくに襲いかかるだろう。五匹とも使鬼としてのレベルは最強だ。そこでぼくは、六番めの使鬼と契約を結ぶことにした……

0（1）

0

ザ・ザの小砂漠を半分わたったところで、月が二つあらわれた。
ぼくはガルシアを止めて、斜め前方に起立する岩の上へ目をこらした。蜜蟻酒は好物だが、今夜は一滴も飲んでいない。なのに何度目をしばたたかせても、月は二つあるようにしか見えなかった。
宮廷の博士どもがこれを見たら、世界の終わりだのアル・ル・タジール王国の破滅だのと、大騒ぎしたに違いない。
もっとよく見るために、ガルシアから下りて、さらに数歩あゆみ寄った。
風がぱたりと止んでおり、マントは少しもはためかない。空気は澄んでいて、星が瞬くさまがよくわかる。こんな夜なら、あのいやらしい砂蟹どもが這い寄ってきたとしても、気配でわかるだろう。ぼくだって、一晩かけて骨にされるのはごめんだ。
眺めているうちに、月の一つが瞬きした。
「円眼鬼か」
そんなことだろうと思った。どこの誰かは知らないが、趣味のよくない術者が放った使鬼ではないか。
もちろん円眼鬼がザコだというつもりはない。こいつを使いこなす術者は、かなり強力なミワの持ち主でなければならない。とはいうものの、
（趣味がよくないんだよね。古代語を使えば、スタイリッシュじゃないってことさ）
あんなごつごつした化け物と、自身のミワを同調させるやつの気が知れない。
円眼鬼は筋肉隆々・フンドシ一丁の巨人で、つるんとした頭部のてっぺんから、フィン族みたいな辮髪をたらし、鼻も口もない顔の

真ん中に、巨大な真円形の眼をそなえている。ばかでかい斧を所持しており、五マリートくらいの岩ならば、一撃で打ち砕く。
（まったく、趣味がよくないんだよね）
溜め息をついた。
ちなみにぼくが命を狙われる理由なら、星の数ほどある。三百年ほど生きてきたが、悪行三昧の人生であった。もっとも、最近はさすがにミワの衰えを感じて、ずいぶんおとなしくしているが。全盛期には、アル・ル・タジール王国を滅亡寸前まで追いこんだこともある。
「トシはとりたくないものだな」
自慢じゃないが、見た目は若い。花も恥らう紅顔の美少年。そのじつ、厚顔無恥な老魔法使いなのだけど。
再び月が瞬いた。やれやれとつぶやきながら、ぼくは左手の指を伸ばし、手の甲を面前にかざした。五本の指には、それぞれ五色の石をあつらえた指輪が嵌まっている。親指から始めて、黄、赤、紫、青、緑……痛みを覚えたように、ぼくは眉をひそめた。
めまいがする。
いよいよミワが使鬼の霊力に、耐えきれなくなっている証拠だ。
こんなことなら、剣術使いの護衛でも雇っておくべきだったが、筋肉隆々・フンドシ一丁の刺客を前にして、今さら悔やんだところで始まらない。ぼくは右手の人さし指に中指を添えて、指輪の一つに触れた。刺すような痛みとともに、黄金色の火花が散った。
「アール・ミーム・ミール・ワーフ。偉大なる夜の支配者。暗黒の王の御名において、我は望み、我は求む。炎と血の精霊、サラマンドルの眷属。ミランダをここに召還せんことを」
指輪が灼熱し、閃光が弾けた。
紅蓮の炎が噴出し、中空で渦を巻いた。
炎はのたうちながら蛇と化し、トカゲと化し、やがてほっそりとした一人の女の姿を描いた。腰まで届く真紅の髪。額と首と左腕に巻かれた黄金の飾り輪。美しい体の線もあらわな赤いドレス。その

スリットから、ほっそりとした脚を覗かせている。
ミランダは左手を軽く腰にあて、右手に炎の剣を引っさげて、中空から青い瞳でぼくを見下ろした。
「あそこにいるの、円眼鬼でしょ。いやよ、わたし。フンドシ野郎の相手なんて」
ミワが弱まると、使鬼もやたらと反抗的になってこまる。全盛期にはずいぶんいたぶって、いや、可愛がってやったものなのに。

0（2）

「余計な口をきくな。おまえは黙って命令に従えばいいんだ」
「あんたこそ、だれに向かって口をきいてるつもりなの、ビア樽」
「お仕置きされたいのか」
「ふん」
鼻で笑いやがった。ちなみにビア樽のことを、タジール公領の方言で「フォルスタッフ」と呼ぶ。これがすなわち、ぼくの名である。
ミランダが剣を振り上げ、軽く振り下ろすと、刀身の炎がほとばしり、一匹の大蛇と化して突き進んだ。こちらへ向かって、だ。ぼくは素早く水冷の呪文を唱え、マントをひるがえした。
眉毛が少し焦げた。もう少し対応が遅れたら、美少年の丸焼きが湯気をたてていたところだ。
「殺す気か！」
と叫んだものの、我ながら愚問だった。今の一撃は勢いこそ弱かったが、完全にぼくをロックオンしていた。要するに、殺る気満々。
さてこうなると厄介だ。今夜の彼女はことさら機嫌がわるいし、ぼくのミワも予想以上に弱まっている。ミワが弱まれば、使鬼を束縛する力も減少する。大魔法使いだなんてうそぶいているが、しょせんは生身の体。使鬼とタイマン張ったところで、勝ち目なんかあるわけがない。
（ヘレナを呼び出すか……）
薬指に嵌まっている青い指輪を横目で眺めた。
五匹の中では最も温厚なヘレナだが、血も涙もない悪鬼であることに変わりはない。ミワによって拘束されていればこそ、命令を聞くわけで、こんな状態で呼び出せば、ミランダとタッグを組んで襲ってくる可能性が高い。いや、ぜったいに襲ってくる。
そんなぼくの窮地を救ったのは、意外にも円眼鬼だった。
「後ろだ、ミランダ！」

三マリートはゆうに越える巨体が大斧を振り上げ、図体からは信じがたい素早さで、彼女の背後にせまっていた。真円形の一つ目が、呪われた鏡のようにぎらぎらと輝いた。

「言われなくたって！」

彼女は振り返りざま、炎の剣をひと薙ぎした。閃光が巨人の胴を直撃した。爆音とともに炎が渦を巻き、円眼鬼はおぞましい悲鳴を上げながら、後方に吹き飛ばされた。そのまま背中で巨岩に突っ込み、ばらばらに打ち砕いた。

澄みきった夜空の下、ミランダは踊るように身をひるがえした。赤く発光する髪がなびき、緋色のドレスから、白い脚があらわになった。生意気なやつだし、さっきは殺されかけたが、じつに美しい。使鬼というものは、こうでなくてはいけない。

「仕留めたか」

「冗談でしょう。相手が何だと思ってるの？　そんなことも感知できなくなったんじゃ、あんたもそろそろおしまいね、フォルスタッフ」

「ご主人さまだろう！」

痴話喧嘩している間に、崩れた大岩の塊が四方へ弾け飛んだ。ラマ王の彫像のように円眼鬼が立ち上がり、雄叫びを上げた。さっきの一撃で腹がざくりと裂け、傷口から蒼い炎が吹き出していた。片手で斧を引きずりながら、よろよろと歩き、一つ目に憎悪をみなぎらせた。

ミランダの瞳に、世にも高慢な侮蔑の色が宿るのを見た。使鬼は飼い主に似るというコトワザは、あながち嘘ではない。彼女は優雅に腕を振り上げ、片膝を立てた。いにしえの女神像をおもわせる、「終撃」の構え。

野獣の咆哮にも似た雄叫びを上げながら、円眼鬼は地を蹴って駆けだし、宙に踊り上がった。見る間に距離が縮まったが、ミランダは微動だにしない。巨人は背後になびいた大斧を片手で引き寄せるようにして、水平に切りつけた。

血の色をした炎が、夜空で弾けた。
次の瞬間、炎に包まれた円眼鬼の上半身が、くるくると回りながらはるか彼方へ飛んで行くのを見た。残りの半分がどうなったか、知るよしもない。ひとつだけわかっているのは、円眼鬼を送りこんだ術者が、今ごろ苦しみのたうちながら、あの世への旅路を急いでいるだろうこと。
使鬼の敗北は、即座に術者の死を意味する。相手を抹殺するために送りこんだ力が、すべて自身に跳ね返ってくるからだ。
月は一つになっていた。さっきより数倍に膨らんだように思える、巨大な満月。その前にたたずんで、ミランダはぼくを見下ろしたまま、赤い唇にすさまじい笑みを浮べた。
「思い知らせてあげましょうか、フォルスタッフ。どちらがご主人さまなのか」

1（1）

1

ル・ビヨン。首都アル・ブリスに次ぐ、王国第二の都市。
荒野に横たわる双子の竜、ロム川とレム川が街の中で合流し、また二つに分かれてゆく。痩せて神経質な姉妹。氾濫をくり返すお転婆な竜たちも、絡みあうことで力が相殺され、広く穏やかな流れと化している。
その豊富で清らかな水を利用して、広大なオアシス都市が築かれている。王国が誕生する以前から街として栄え、またかつて、ここに百年にわたって大宮司が幽閉されていたことで知られる。そのせいか、神社仏閣が非情に多く、なぜか魔術師が好んで住みたがる。
ル・ビヨンの場末といえば、カンテラ通りが南で尽きるあたり。ズ・シ横丁と呼ばれ、じめじめした土地に蜘蛛の巣のような路地が入り組み、あやしげな貧民、遊び人、悪人どもが巣食っている。この騒がしいスラム街をぼくは気に入り、ここ五年ばかり、ねぐらにしている。近所の連中はぼくのことを、ただのインチキ占い師と認識しているようだが。
「よお、フォルスタッフ。今夜はまた、いっそう冴えない顔をしているな」
青猫亭に入ると、ヒゲ達磨の亭主が目ざとく見つけてそう言った。
「悩み事があるんなら、占ってやろうか、先生」
店にひしめく酔客たちが、どっと笑う。ぼくは眉をひそめ、無言で隅のテーブルをめざした。硬い椅子に腰をおろしたとたん、背骨が引き裂かれるような痛みにみまわれた。
（くっ……！）
昨夜はあやうく死にかけた。
さいわいミランダは円眼鬼との戦闘で、彼女の思惑以上に力を使

っていたため、どうにかこうにか、指輪に押し籠めることができたのだが。おかげでぼくは、一日じゅうベッドから起き上がれず、夜になってようやくねぐらを這い出し、腹を空かしてズ・シ横丁をさまよい歩く恰好。

「ほんとうに、だいじょうぶなんですか」

酒壷と料理を手に、ロザリオが近づいてきた。三つ編みにした、燃えるような赤毛を見て、ぼくは痛みを思い出したような顔をしたに違いない。もっともロザリオはミランダの五百倍温厚で、慎み深い。あのヒゲ達磨から、こんな娘が生まれたこと自体、奇跡といえた。

ぼくが飲み食いするものはいつも同じなので、注文なしで運び込まれる。常に特上の酒をたのみ、払いもいいので、だいたいこの時間には、ぼくのために隅の席が空けてある。

「ごめんなさいね。父はああ見えても、フォルスタッフさんのこと、気にかけているんですよ。ここ最近、ずっとつらそうに見えるって。わたしも、とても心配です」

ヒゲ達磨が気にしているのは、ぼくの財布のほうだろう。そう思ったが、もちろん口にしなかった。

「ありがとう。きみの顔を見たら元気が出たよ」

歯の浮くようなセリフを言うと、ロザリオは花が咲いたように、頬を赤らめた。

この娘を陥落させるのはた易い。奴隷にしてみたい気がしないでもないが、それではここに来る楽しみがなくなってしまう。五十年前なら、迷わず鎖で引き回す楽しみを選んだのだが。純真なまま眺めていたいというのは、まさに親爺趣味。ぼくもトシをとった証拠であろう。

ロザリオが立ち去ると、ぼくは切子硝子の容器に酒を注ぎ、パンをちぎって煮豆のスープにひたした。食えないことはないけれど、基本的に肉は食わない。美酒と粗食が、ぼく流の長生きの秘訣である。一人で静かに食事する習慣を知っているので、ガラのよくない

常連客たちも、この席には近づかない。
ぼくの食事を邪魔だてしたヨソ者が痛いめにあう場面を、何度も目の当たりにしているからだ。
食事を終えるとロザリオが空の器を下げ、薔薇茶を置いていった。一口飲んだところで、テーブルの上に影がさした。
見上げると、つぎはぎだらけの防水布で全身を覆った人物が、ぬっと立っていた。こちらのほうが影法師みたいだった。長身で針のように痩せていた。フードの中の顔は濃い影がべったりと貼りついているため、よくわからない。ただ鋭い眼光と、食み出した蓬髪だけが、影の中にいちじるしかった。
ぼくが驚いたのは、この男がまったく気配を感じさせず、ここまで近づいたことだ。
「ほかに席がなかったんでね。ここ、空いてるかね」
目の前の椅子を指さして、男はかすかに笑ったようだ。あれほど騒がしかった酒場は、一瞬で静まり返り、まわりの連中が、固唾を呑んで見守っているのがわかった。男を睨みつけたまま、ぼくは答えた。
「もちろん」
「ならば、座らせてもらうよ。ずいぶん長いこと歩いてきたものでね」

1（2）

男の声に聞き覚えがあることに、ぼくはとっくに気づいていた。だがどうしても思い出せない。自慢じゃないが、記憶力はあまりよいほうではない。

自分で言ったとおり、この男が旅を続けてきたことは、間違いないだろう。腰かけるときに、荒野のにおいと、血のにおいが少しした。相変わらずフードを取らぬまま、ミイラのように防水布を巻いた指を、テーブルの上で組み合わせた。なんという眼光だろう。このぼくが、生身の人間に恐れを感じるなんて。

「あの……」

胸に盆を抱いた姿勢で、ロザリオは蒼ざめていた。ぼくは彼女にウィンクしてみせた。びっしょり冷や汗をかいていても、カッコだけはつけたい。

「いいんだよ。ぼくと同じものをお出しして。それとも、肉がよろしかったでしょうか」

「いや、同じものでけっこうだよ。フォルスタッフさん」

ボロ布を巻いた片手をあげた。ロザリオが逃げるように立ち去ると、常連たちはホッとしたような、がっかりしたような溜め息をもらして、それぞれの雑談に戻っていった。なんだ知り合いか、といったところだろう。

男はたしかに、ぼくの名を「フォルスタッフ」と呼んだ。

「何年ぶりでしょうか」

カマをかけてみた。酒と料理が運ばれ、心配顔のロザリオが再び立ち去るまで、男は無言で指を組み合わせていた。砂漠のような声で、男は答えた。

「およそ百三十年ぶりかな。昔の話だ。忘れてしまうのも、無理はない」

男は酒壷の栓を開け、そのまま口をつけて傾けた。本当にミイラ

ではないかと疑いかけていたが、一応飲み食いするらしい。百三十年前といえば、ぼくが最も羽振りのよかった時代だ。
魔軍を率い、当時のタジール公と手を結んで、強大な王国軍を次々と蹴散らしていった。王宮を包囲して五十日後、あることがきっかけで、突然気が変わるまで。
（ここに至って包囲を解くというのか。愚かな。もし汝がそれを欲するなら、我は汝のもとを離れ、必ず汝を滅ぼすであろう）
あのときの、憎悪に燃えるヴィオラの顔が、目に浮かぶようだ。
紫の指輪に封印されている、五匹の中でも最強の力をもつ使鬼。ついに彼女は反乱を断念したが、ぼくもまたあれ以来、一度もヴィオラを呼び出していない。右手の中指に嵌められた紫のリングは、いわば「開かずの指輪」と化していた。
「思い出したかね」
「いや」
なぜ男を思い出そうとして、ヴィオラの姿が浮かんだのだろう。
乾いた笑い声をもらすと、男は両手を上げてフードにかけた。ゆっくりと後ろにずらされた黒頭巾の中から、まず白い蓬髪がばさばさと食み出した。面長な、これ以上ないほど痩せた顔。白い苔のような無精ひげ。尖った鼻と険しい眉間。幾筋もの傷が走る蒼黒い顔の中で、目だけが鉱物のように輝いていた。
「ダーゲルド……！」
声が震えた。ダーゲルド・オーシノウ。かつてのぼくの師であり、敵でもあった男。百三十年前に死んだとばかり思っていたのに……そう、彼女によって、かれは殺されたのではなかったか。もとはダーゲルドの使鬼であった、ヴィオラによって。
ダーゲルドのもとで、ヴィオラはシザーリオと呼ばれていた。少年の扮装をして、戦闘時にのみ呼び出されるのではなく、平時もかれの召使のように仕えていた。
「生きていたのですか？」
むろん、目の前の男が幽鬼でも生ける屍でもないことは、わかっ

ている。他人の空似でもない。かつての洒落者が、ボロ屑のようにやつれ果ててはいるが、こんな目をした男が、二人といる筈がない。そうしてかれがダーゲルドに違いないことは、次の一言で明らかになった。

「シザーリオは元気かね」

「あいにくと。あれから一度も呼び出していませんよ」

「だが、近いうちに、いやでも顔を合わせねばならんだろう」

「何が言いたいんです？」

かれは答えず、また酒壷を傾けた。煮豆のスープはまったく手がつけられないまま、テーブルの上ですっかり冷めていた。あらかた空になった壷を置き、指で口をぬぐった。ボロ布にどす黒い血がにじむのを、ぼくは見逃さなかった。

2（1）

2

ヴィオラを紫の指輪に封印してしまってから、ぼくは彼女の夢を頻繁に見た。

夢の中の彼女は、必ずしもぼくを責めてはいなかった。けれどもそれは、ぼくの願望に過ぎなかったのかもしれない。

（まだぼくを憎んでいるのか）

（我に汝を憎む理由はない）

（ミワから解き放たれなくないのか。自由になりたくないのか）

（自由など、しょせん幻想に過ぎぬ。人は鳥の翼に憧れるが、鳥は翼を得たばかりに、休む間もなく世界じゅうをさまよう宿命を、背負わねばならなかった）

（まだダーゲルドを愛しているのか）

（……）

（だからぼくを、許すつもりはないのだろう。答えてくれ、ヴィオラ）

（我は使鬼なるぞ。それが答えだ）

かれが席を立つ気配で、ようやく我に返った。

「どこへ？」

「少し外が見たい。この街は、久しぶりだ」

二人ぶんの勘定を払い、青猫亭を出ると、ダーゲルドは店の前にたたずんでいた。フードつきのマントが、重々しい影を引きずっていた。

人は死期が近づくと影が薄くなるというが、魔術師の場合は、その逆であるらしい。影の存在がだんだん強くなり、ついにはそいつに呑まれてしまう。人の道に外れた技。神というのか何というのか知らないが、光り輝く存在に背を向け、ひたすら闇の力に頼ってき

た、その報いなのだろう。
　ぼくもまた、近頃では明るい月夜など、自身の影を見てぎょっとすることがあった。そいつは見知らぬ生きもののように、いつかぼくというクビキを逃れて、復讐を果たす日を虎視眈々と狙っているのだった。五匹の使鬼たちの意志を、代弁するかのように。
「ほお、ブリキの自走夜警が、まだいるんだな」
　いつしか、かれと肩を並べて、淋しい通りを歩いていた。
　両側の貧家の窓から、頼りない灯りが洩れているばかりだが、欠けはじめた月の影が落ちて、街路を蒼白く浮かび上がらせていた。かん、からん、と、うつろな音を響かせながら、不恰好な影が近づいて来た。ダーゲルドは、この影のことを言ったのだ。
　それは古めかしい夜警の制服を着せられた、ブリキのゴーレムだった。中に機械仕掛けもなければ、人が入っているわけでもない。まったくのうつろだという。むかし、幽閉されていた大宮司を監視するために、何十体も作られ、強力な魔法によって動いていたという。
「たまに見かけますね。もはや幽霊を見たほどにも、気にかける住人はいませんよ。どこから来てどこへ行くのか。日が落ちると同時に、ふらふらとさまよい出て、クロック鳥が鳴く頃には、いつのまにか消えちまいます」
　かん、からん。
　やや前屈みの姿勢で、自走夜警はぼくたちとすれ違い、右に左によろめきながら、街路の角を曲がって消えた。
　ぼくたちはどんどん街外れまで歩き、丘をのぼる小道にさしかかった。月が丘を照らし、奇妙な巨獣のように見せていた。実際に、かつてこの丘には、びっしりと牙の生えた口で常にニヤニヤ笑いしている巨獣が棲み、人をさらって食っていたとか。今では頂上に、古代神殿の廃墟が残るばかりである。
　倒れた石柱に、ダーゲルドは腰をおろした。いかにも疲れきったかれは、今にも自身のマントに押しつぶされそうだった。ぼくは突

っ立ったまま、月とダーゲルドと向き合う恰好。
「長生きなんか、するもんじゃない。生命力の強さか、それとも悪運というやつか。いずれにせよ、老醜をさらす恰好となった」
「あなたのミワは、まだ充分強力ですよ」
「気休めはいい。おのれのミワのことは、おのれが一番よくわかっている。指輪をすべて抜き取っても、このザマだからな。シザーリオが封印されたままでよかったよ、フォルスタッフ。彼女には……」
こんな姿を見せたくなかった。
という言葉を、きっとかれは飲み込んだに違いない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1464z/

六番めの善鬼

2011年12月17日05時54分発行